

市民の息吹加え再興願う



「糺河原勧進猿楽」の再興に向けて、意義や思いについて語り合
(左から)新木、観世、松岡の各氏(京都市左京区・下鴨神社)

新木 下懶遊社の式年遷宮は平安時代の中ころ、長元9（1036）年に国家事業として始まつたとされています。ここから数えて来年行う遷宮が第34回目になるのですが、紀元前90年目に糺の森の中心に磐座があり瑞垣を造り替えたとの記録があります。この時からだと59回になります。遷宮は大きな節目でありますので何か事業を行うのが通常でした。過去には猿樂の公演もありましたし、昭和48（1973）年の遷宮では明治の初めに途絶えた流鏑馬神事が再興されました。来年の遷宮では奈町による勧進猿樂は3回、世代にわたつて約30年ごとに行われています。毎回将軍が後援し、将軍をはじめ公家・武家・僧侶などがそろつて観覧する一世一代の大イベントです。周囲が63間（114㍍）ぐらいの円形の桟敷が組まれ、その中央に舞台が設けられました。ここで3日間、上演されるわけです。1回目は9代將軍足利義満の時、北野

京都市左京区の下鴨神社（賀茂御祖神社）が来年4月27日に行う第34回式年遷宮の奉祝行事として、室町時代に足利将軍の後援で盛大に行われた「糺河原勸進猿樂」を550年ぶりに再興させる動きが高まっている。そこで下鴨神社宮司の新木直人氏、先祖がこの勸進猿樂を公演した能楽觀世流二十六世家元の觀世清河寿氏、能楽研究の第一人者で東京大教授の松岡忠平氏に、糺河原勸進猿樂の意義や再興への思いを語り合つてもらつた。進行は、能をはじめ伝統芸能の研究者、濱崎加奈子専修大准教授が務めた。

◆出席者
下鴨神社(賀茂御祖神社)宮司
新木 直人氏
二十六世觀世宗家
觀世 清河寿氏
東京大大学院教授・能楽研究者
松岡 心平氏



◆コーディネーター
専修大准教授
濱崎 加奈子氏



あらき。なおと 1937年京都市生まれ。京都市伝統行事伝承者。京都市伝統芸能労者。全国観劇連合副理事長。下鴨神社の歴史や祭祀に關する講演活動を行うほか、葬祭の前祭で最古の神祇行列・御陰祭の謎を解き明かす「神游の庭」などの著書もある。



まつおか・しんpei 1950年岡山県生まれ。
廃止になつた能の曲を復曲するなど能の現場と関
わりながら、日本文学や歴史を総合する形での中
世研究を行つてゐる。著書は「宴の身体」・「バサラか
ら世阿弥へ『能・中世からの響き』」など多数。観世
文庫理事でもある。

京の新たな祭り事に 鎮魂の芸術意義深く 身分超え楽しむ空間

新木比
觀世比
松園

葉がございますが、私たちは
にそういう神々しい莊厳な氣
ちで、なおかつ人々に寄り添
姿勢で修業しています。ただ
じ演目でも演じる中身は室町
代と現代とは明らかに違
す。音阿弥は当時の時代の息
を取り入れて演じたと思い
ます。それをそつくり再現する
とはできませんし、する必要
まったくないと思います。伝
文化に身を置いている者は、
統という枠にはめられること
なく、むしろ打ち破つていく工
ルギー、革新性が必要と考え
ます。現代人の感性に裏打ちさ
る猿楽の再興でなければなら

観世宗家所蔵の「糺河原勧進猿楽舞台棧敷図」
(観世文庫提供)

渾沌とした時代です。東日本大震災も発生から3年半を迎ました。亡くなられた方への慕いの念と、今生かされている人々へ能楽という芸術を通してやしの心を発信していくのは大切なことと考えています。観流の出発点でもある糸河原の進猿楽が再興ということには非常に意義深いと思います。

松岡 勧進は建物の造営や修理のために寄付を集めるのが目的であり、観客は淨財を寄せた猿樂を楽しみながら、先祖の養や自身の極楽往生を願うのです。また、遷宮と猿樂も非常に深い関づがあります。

常時 同じ方 吹きこまも 伝統なまなれなまり組みは京都にとってもプラットホームになると思います。神社は市里の城も築かれていたことから紅の森とともに相当広い区域であったのは間違いないまません。

松岡 もう一点指摘しておきたいことは、この時代の勧進劇は一般席が設けられ、庶民も見物していくことです。日本の中世という時代がそうしたのでしょうか、身分の違う人たちが一緒にひとつの演劇を観覧する形は他の時代にはみられないことです。そういう意味で勧進劇は特異な空間を創りだしていると言えます。

新木 勧進猿樂の再興への取り組みは京都にとってもプラットホームになると思います。神社は市里